

# 東成区の昭和・ホイラン

絵と文：柳たかを  
(マンガ家)

ぼくがものごころつく昭和30年頃、大阪の路地裏は土道や空き地がまだいたところに残っていて、初夏の夕には、小川のそばでチカチカ点滅するホタルもよく見たものです。

ぼくは4人兄弟で歳の離れた2人の兄(昭和15年と17年生まれ)、3歳上の姉がいます。年齢差があるので兄達に遊んでもらった記憶はほとんどないのですが、戦中生まれの兄達は大阪空襲を幼時に体験しています。幸い爆撃目標とならない工場地でなかったためか、路地も兄達も難を逃れました。

戦後間もない頃の子供遊びは、物不足のせいもありピ

ー玉遊びやベーゴマ遊びでも負ければ自分の持ち物を取られるのが当たり前の真剣勝負だったらしい。

熟練した子供に大人が持ち玉をあらかじめ取られたり、その逆もあった。

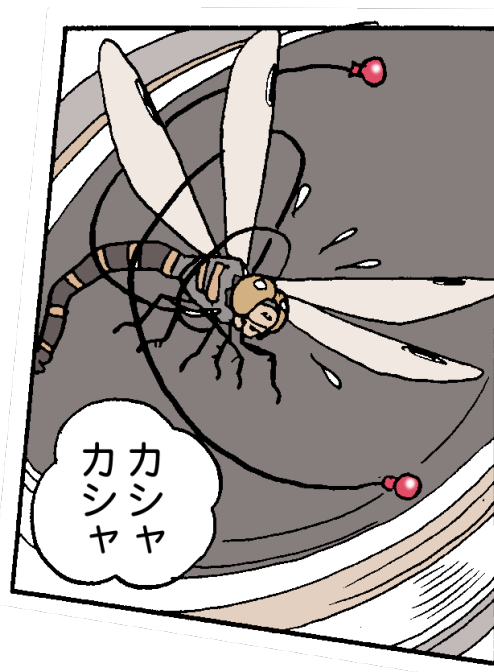


市内に自然がまだ残っていた時代で、夏になるとオニヤンマなどトンボも飛び回っていました。

特にトンボの王さまオニヤンマは、大柄な身体と威風堂々の飛び方でトンボの王さまとして憧れでした。

トンボを捕る方法にはいくつかやり方があり、トンボ釣りという捕り方があります。

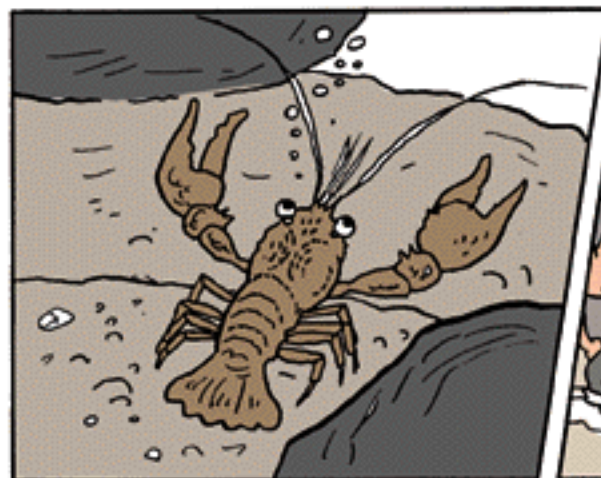
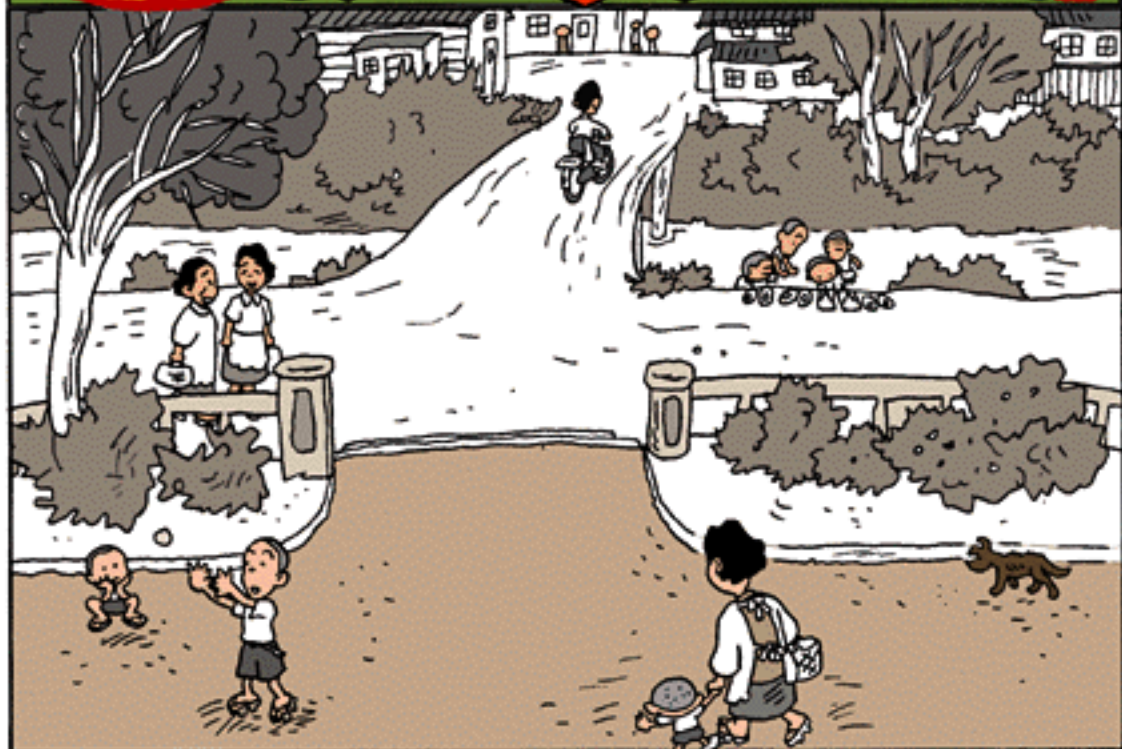
80センチから120センチぐらいの綿糸の両端にセロハン紙で小石か魚釣りで使う小さな鉛のおもりを包みくりつけます。夏の夕方、低空を悠然と飛んでくるオニヤンマの鼻先にゆっくり回転させながら放り上げる。上手く投げるとヤンマは回転するおもりをエサの虫か雌と勘違いするのか飛びついてくるそうです。



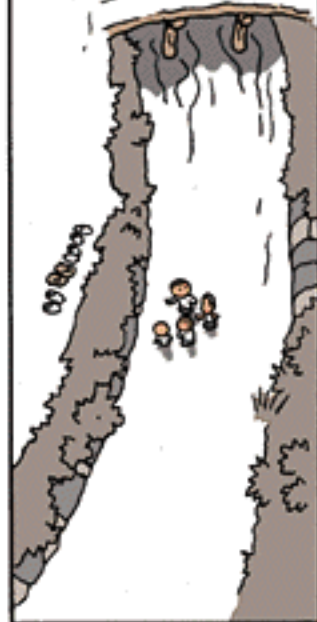
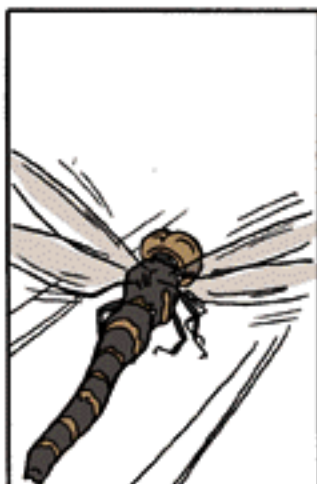
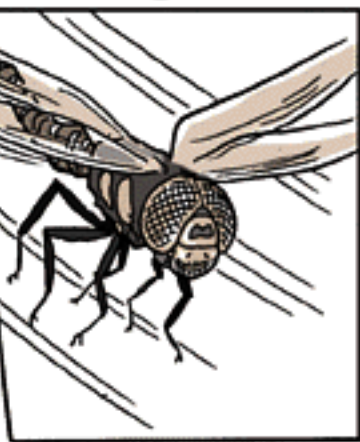
その瞬間、別のおもりと糸がオニヤンマの身体にグルグル巻きに絡みつき一緒に空から落ちてくる。

「カシャカシャッ…」  
オニヤンマの習性を利用し

た捕獲方法で、兄からその話を聞きながら鮎の友釣りを連想しました。かつて豊かな自然を相手にしたこんな遊び方があったことを現代の若い人々に知ってほしいと思います。







東成区の  
昭和

# ボイラン

昔遊び

